

松戸市協働のまちづくり協議会（第2回）議事概要

- 《日 時》 令和7年6月1日（日）13時～16時30分
- 《場 所》 松戸市役所 議会棟3階 第2会議室、特別委員会室
- 《委 員》 犬塚 裕雅 会長、牧野 昌子 副会長、坂野 喜隆 委員、
小川 早苗 委員、山口 恵理子 委員、羽村 太雅 委員、
星野 健一 委員、上野 真一 委員
(欠席) 大成 哲雄 委員
- 《傍聴者》 8名

1 開 会

※欠席者報告・委員定数確認、配布資料確認、傍聴許可確認

2 協働のまちづくり協議会 会長挨拶

3 議題

- ・令和6年度実施分 協働事業・市民活動助成事業 成果報告会（10事業）

（1）

事業名：地域まるごとで孤育てを予防する連携システム事業（協働事業）

団体名：まつどでつながるプロジェクト運営協議会

担当課：子ども政策課

委 員：地域円卓会議の成果が書かれていて良かったと思う。継続を検討いただいているということで、とてもありがたい。円卓会議に参加される行政の方の割合はどれくらいであったか。共通テーマについて学び合える研修会なども今後検討すると書かれていたので期待している。

団 体：各回で変わるが、平均して会議参加者の半分位が行政の方であった。研修会については、今までは特にテーマを決めず、インプットよりもアウトプット中心で、感じることを共有していた。共通したテーマとしてやはり、支援者も学んでいき、今後は民間も一緒に、お互いに学びを深めていくことを提案させていただいている。

委 員：今回は子ども政策課と一緒に取組まれたと思うが、他の課とも一緒にやってみると今後の展望が広がるのではないかな。

団 体：今までは主に子ども部の方たちに積極的に参加いただいていたが、これからは他の部署の方とも一緒にやっていきたい。通常の円卓会議の中に呼んだり、子どもについて理解を深めていただいたりすることを検討している。

委 員：3年間のサポーターの登録者、活動をしていただけた方々の数を教えて欲しい。今後の事業展開の中で、例えば協定書を結ぶなど取組みを継続することで、発展が

あると期待している。今地域にある仕組みを利用した人材、これまでやってきた方々の知見を利用することや、他の部署とのつながりも期待している。

団 体：養成講座の人数について、1年目と2年目は概ね15～16名位であり、3年目は8名であった。講座を経た方は約40名。具体的に繋がっている方でいうと、LINEのグループで実際にお手伝いしても良いと言って下さる方は10名程である。

委 員：円卓会議というのは様々な分野に活用していけるものなので、これからも市のためにぜひお願いしたい。

委 員：3年間続けている養成講座も大切だが、円卓会議がとても大切である。今までのことを総括し、市内の他のNPOも使えるようなノウハウにしてもらいたい。松戸発の円卓会議の経験知を言語化してもらえると大変ありがたい。

(2)

事業名：町会・自治会の活動をPRして親しみをもってもらおう事業（協働事業）

団体名：できる街プロジェクト

担当課：市民自治課

委 員：自治会長から冊子が使いやすいという声があり、自治会加入者も激減していないということは、成果があったと言えると思う。アニメ・漫画業界の中で注目されると、また違った波及の仕方もあるかと思う。どんな手応えを感じているか。

団 体：他市から「松戸で町会・自治会の漫画をやっているらしいが、うちでもやってくれないか」という話は来ている。

委 員：町会・自治会というテーマに、漫画とアニメで取り組むことが新しいと感じた。加入率の問題を抱えている他市に、『じちまる』と『まつかめ』を紹介したところ、見ている、羨ましいという声があった。クリエイターの方が、会長のところにヒアリングに行く等、若い世代にはあまり馴染みのないことだったと思う。ヒアリングした感想を伺いたい。

団 体：お祭りに係わる自治会長には、祭りの成立ち等を伺う事ができた。

委 員：町会長以外にも、その地域のオピニオンリーダーのような方がいらっしゃると思うので、地道な人海戦術のようなものがとても効果があるのではと思う。町会長さんたちから冊子が好評だったとのことだが、どれくらい活用してくれたのか。市全体でどのくらいの効果が出ているのか。

担 当 課：全町会・自治会に配ったところ、その後約10団体の会長さんから漫画冊子300冊位追加配布依頼を受けた。とても活用されているのではないかと考えている。

委 員：今後も転入者の方々への配布を継続していくのか。

担 当 課：冊子作成の予算を取っており、直接その場でお渡しできるというところから、配布は継続していきたいと考えている。

委 員：今回、担当課の宣伝力等素晴らしいと思った。市民課の窓口で転入者に冊子を配布するのはとてもいいと思う。学校への配布の成果はどうか。また、継続していくのか。

担 当 課：市の職員のお子さんの話になるが、カラフルで分かりやすい冊子だったので、綺麗に持ち帰ってくれたと聞いている。今後の継続については、学校ではデジタル化が進んでいるということで、冊子の形式にするかというところは検討中である。何らかの形で今後も継続していきたい。

団 体：小学校への配布については 10、20 年後に成果が出れば良いと思っている。

(3)

事業名：四世代のきずなで、豊かな生活環境を実現する事業（ステップアップ助成）

団体名：小金原みんなでわくわくする会

委 員：1 年間で多くの活動をやられていると思うが、スタッフの方の役割分担はどうなっているか。チラシはどのように、どういった範囲で配り、どんな効果があったのか。どれぐらいの年齢の方を活動に呼び込むのか。

団 体：4 つのテーマでやろうと考えていたが、負担が多すぎることに、中身も重複することもあり、活動の中心である小金原の町内会の方たちも集まってマンパワーを補充し、皆の調整と先導という形で進めてきた。チラシは町内会の中で 400～500 枚位、周辺を含めると 500～600 枚位配り、個別の活動内容を PR してきた。大体 20 代以下の若手の参画を進めていきたいと考えている。

委 員：小金原は地域活動が盛んなところである。素晴らしい活動をされている秘訣などを聞かせていただきたい。

団 体：小金原は、小金原団地があって、高齢化が進んでいる町。町としては坂が多い。「坂がある場所は栄える」ということで、マッチングしている。駅から孤立していて、バス便しかないので、そういった意味では違った環境だと思う。まず、市民が動かないといけないので、自力で頑張りたいと思っている。

委 員：地域活動は役員の方たちが企画をして、参加してもらうのが今までのスタイルだったと思う。企画をする段階から若い世代に参加をしていただくことで、広がっていくのではと思う。

団 体：押し付けや義務ではなく、きっかけ作りやみんなでやろうという気持ちが大切。一回やると面白いとか、花植えてこんなに綺麗になるとか、感覚が分かるともう少し参加してもらえるのではないかと考えている。

委 員：6 年度の実績の中で子供たち向けのプログラムがなかったので今後作りたいとあった。四世代交流の最初として行ったゴミ箱清掃は、継続的に、子どもたちも一緒に参加し行っているのか。

団 体：ゴミ箱に関しては町会の方に移管して管理してもらっており、子どもたちの参加は難しい状況にある。ただ、ごみ箱もそのまま置いておくと殺風景で汚い等ネガティブな話になっていくので、プランターなど置いて花を植えると、回収していく方たちも気持ち良く、捨てる方たちも、綺麗になっていけば汚さないということが出来れば良いと思う。これから考えていきたい。

委 員：もともと、町会を活性化させていくという目的もあったと思う。皆さんの取り組み

の結果はどうだったか。

団 体：明るくはなってきたかと思う。町会への参加率も上がったかと思う。

(4)

事業名：みんなで育て みんなでつくる 沿道の食べられる景観事業（協働事業）

団体名：エディブルウェイプロジェクトチーム

担当課：みどりと花の課

委 員：力を入れた事として、メディアへの露出、新聞とラジオとあるが、具体的にはどのような働きかけをしたのか。成果はどうか。

団 体：メディア掲載に関してはこれまで情報発信をしているのを見た記者の方が町のプランターの植え付けのイベントに取材に来て下さった。それを見たラジオの企画の方から声掛けをいただいた。こちらからプレスリリースをしたというわけではない。自然に活動を見ていただいて取り上げていただくことができた。

委 員：そこを通る人たちが見て楽しんでいるという話があったが、積極的にプレスリリースを打ったり、取材を受けたりしていくと、これから広がりができ、応援団が増えていくのではないかと思う。

団 体：市内の他の地域でも、同じことをやりたいといくつかの町会から話をいただいている。担当課ともどうやったら展開できるか検討し始めている。

委 員：今は市内で広めていくと思うが、知らない地域の方ができるシステム、手順ができ、松戸から始まった活動だと広まると良いと思った。

団 体：午前中に他県から視察にいらっしゃっていて、その町々で主体が違うと思うので、やり方や、気を付けること等、やはり対話が大事という話をして来た。システム、手順をまとめておくことも必要だと感じた。

委 員：千葉大学との関係はどのくらいか。松戸形式というのを確立したのであれば、特許を取られて、他の団体も使って良いという時期かと思う。

団 体：大学とは直接的に関わっているわけではないが、去年も園芸療法の研究をしている学生が来てくれたり、卒業生でこの活動に関わっている方とLINEで情報共有しているので、OB・OGの方々が活動に戻ってきてくれたりすることはある。園芸学部との学生とも改めて繋がりが持てたらと思った。特許の話は、チーム内でも議論が出たところ。これまで各地で相談に来てレクチャーして、やってくださっている所が10数箇所あるが、我々がもし、できなくなる可能性が出てきたら困るので、チーム内でも検討しようと思った。

委 員：協働事業2年目だが、担当課にとって、今後、目玉事業の一つになっていく可能性は実感されているか。

担 当 課：食べられる景観事業という広い括りで行くと、松戸地区がメインだが、今年度から北小金にある、市が管理している場所でエディブルガーデンの事業が始まってくる。この食べられる景観事業は当課としても広く市内で浸透させていきたいという思いはある。

委員：ノウハウを保護して、他の人たちも使えるということにも配慮しながら、市でもその辺りを確立してくれるといいと思う。

(5)

事業名：まつど de SDGs の輪を広げようプロジェクト事業

団体名：まつど地域活躍塾つながりの会

担当課：政策推進課 SDGs 推進担当室

委員：使用料及び賃借料の支出が少なかった理由を教えて欲しい。

団体：フォーラムの会場取りに苦戦し、市でアトスポットまつどを押さえてもらい、その分の支出が減ったのが大きな理由である。

委員：WEB 上で事例集が公開されたのは良かったと思う。是非、発信にも力を入れていただきたい。

団体：昨年度から市の公式ホームページ上にて活動を紹介いただいております、そういう効果もあり参加者が集まるようになってきたというところはある。

委員：団体の会員の中で、実際に協働事業の活動の中心になるのは少ない人数なのか。他の会員の分担をもっと広げられないのか。教えて欲しい。

団体：SDGs 推進担当チームということで4～6 人中心メンバーがいる。当日の手伝いの参加者や広報などは LINE で呼びかけて、参加や協力者を募るというやり方をしている。できるだけ多くの会員にも周知してお手伝いいただくような形で内部では進めている。

委員：ネットワーク団体の仕組みを教えてください。

団体：SDGs の活動に協力してくれる団体を募り、ネットワーク団体に入ってもらい、集会をやるときの広報や参加を募る仕組みを作っている。現在、市民団体と企業、合わせて 22 団体が加入し協力してくれている。

委員：担当課が協働事業を行った意義を教えてください。

担当課：市民に根付いた PR については、課としても苦労しているところなので、つながりの会と協働事業を行ったことで幅広く市民団体の方に周知することができた。

『アトスポットまつど』で SDGs の活動をやるのも課として初めてなので、実施できたことも含めてつながりの会との協働事業のおかげだと思うので大変感謝している。初年度の反省も含めて取り組みをきちんと行ったことが成果に繋がった。

団体：担当課と毎月 1 回対面での話し合いの場を設けているので、そこで問題点や進捗状況などを把握している。2 年目はよりコミュニケーションが取れて密になり、円滑に進んだと感じている。

委員：WEB の事例集見せていただいた。SDGs と大上段から言うのではなく、身近な事例が載っているのが良いと思った。

団体：ローカルなレベルでどう SDGs を実装していくかという所が大きなところだったと思う。そこが少し見える化して、より市民の方が身近に感じられるとより広まっていくかと思うので、大切にして今年度も進めていければと思っている。

委員：全国に発信する、学会の中で発表される等構想はあるか。

団体：まだ担当課とは検討していない部分ではある。頂いた助言をもとに今後、広まりという部分で検討していければ良いと思う。

(6)

事業名：『まつどちゃん』シリーズ製作事業（スタート助成）

団体名：まつどアソビティ

委員：動画の再生回数は決して多くはないが、どちらかというと参加している子どもたちがしっかりした YouTuber 体験ができるようなところが良かった。YouTuber は子どもたちに人気がある職業だが、なかなか自分たちでやろうとした時に分からないところがある。大人がしっかり関わっていくことで、安全に体験させてあげられるので素晴らしいと思う。コンテンツ自体も再生回数が少ないのが勿体ないと思うくらいで松戸に住んでいる人たちにもっと見て欲しいと思う内容だった。

上野委員：団体単独でやるよりも、協働事業のように市と一緒に進めていけばもっと良いと思った。1 年度でやめてしまうのか、今後も続けていくのか。

委員：ほとんど自分一人でやったということもあり、持続は難しいが続けていきたいと思っている。面白い部分はあり続けては行きたい事業ではある一方で、子どもの本気度がまだ引き出せていないというのが実感としてある。やはり、街の中で子どもと大人が会おうとぎこちないと感じるが、それは社会的レベルでの構造の問題というか、「子どもは大人からしてこんなに遠いのだ」と感じている。実際に活動してみて気づいたりして、それ自体が活動の根っこにある子どもをちゃんと社会の一員にしていく、これからのあり方を考えていくということを感じている。

委員：松戸は子ども政策がいいと言われているが、子どもが市の色々な施設の名前は知っているが行ったことがない、どんなことをやっているか分からないということがあり、こういった子ども目線の紹介はとても良いと思った。もっとこういったことをやっていただきたいと思う。協働事業でやっていかれるといい取り組みだと評価する。

委員：YouTube を見せていただいたが、子どもたちが生き生きと動いており、大人が見ても子どもが見てもとても良いと思うのではないかと感じた。助成金の中身で一番多いのが報償費の出演者謝礼だが、子どもたち一人 3,000 円満たない。これだけ一生懸命に出演してくれている子どもたちは随分交通費等かかっているだろうと思った。

委員：切り口がすごく面白い。これを、この活動を続けていくための仲間づくり、体制作りが宿題になってくるのではないと思う。大人たちや、あるいは大学生などが狙い目ではないか。市内の大学を巻き込んでみるというのは良いと思う。

(7)

事業名：「おひとりさま安心」講演会・相談会事業（スタート助成）

団体名：特定非営利活動法人 おひとりさま安心コンシェルジュ

委員：「おひとりさま」という切り口が今の世情にはとても適応していると評価している。
多くの人たちに普及させて相談に繋げていくための問題や反省点をもう一度教えて欲しい。

団体：昨年度はほとんど私一人で活動していた。私が地域の包括に2回行き、あとは自治会活動などに行った程度。他の理事たちも1、2箇所位しか行けなかった。意識の涵養というところがNPOの市民活動でよく言われている「どの様にしていかなければならないか」というところが1点。理事長に相談して、年3回相談会を開いて、講演会も皆が動いてくれた。周知活動は、資料をもっと出さなければならぬと思っている。

委員：講演会や相談会の内容が「おひとりさま」でなくても、高齢の方にとっては合う内容だと思う。わざわざ「おひとりさま」とつけなくても講演会などは違う方も行けるのではないかなと思う。NPOの名称が「おひとりさま」なので、それが載っていれば、講演会のチラシなどでわざわざ言わなくても良いのではないかな。「おひとりさま」ではない人は行きづらいというところもあるかもしれない。

団体：なぜ「おひとりさま」かというところは、松戸市成年後見活動団体が活動していて活動が盛んなところ。やはり、特化するところでは常盤平の独居老人の方ということで「おひとりさま」。若年層、二十歳前後の方も成年後見、終活というのは興味あるということもありますし、今、1人でどう終活をしていこうかとなってくると、フックワードというところで「おひとりさま」というところで成年後見という形にしている。やはり、刺さるものというところで「おひとりさま」の方が良いかというところである。

委員：フレイル予防は行政をはじめ、いろいろなところでやっているのだから、大変だと思う。
3月18日、「おひとりさま」講演会で、フレイルの講演と相談会をやられたと思うが、フレイルの講師は団体が行ったのか。

団体：講師の方を無料で招聘した。市に協力いただき、保健師の方、専門の方を呼んで3、4名程でやっていただいた。

委員：今年度、助成事業の方は撤退ということだが、法人としての活動は継続する。体制をもう一回整え直し、また、手を挙げていくのか。

団体：出来れば、ステップアップという形でもうちょっと大きい形でやっていきたいと思っているが、体制と意識の涵養というところで、2、3年でつぶれていくということがないように次を目指しながらやっていきたい。

(8)

事業名：ぶどうの家 おもしろ実習教室 事業（スタート助成）

団体名：特定非営利活動法人 葡萄の家

委員：集客の方法について、チラシ中心に行っていた場合は何枚ぐらい出して、どんなチラシだったのか。参加者の中における障がい者の割合はどのくらいだったのか。

団体：集客については、リピーターが多いイベントなので、アンケート用紙の下の「参加したいですか」のところに住所を書いていただき、その方に送ったり、新聞、広報誌等に掲載させていただいたりした。参加された方のうち、障がいがある方は4人であった。

委員：同じ日で3回実施したのか。

団体：そうである。10:30の回、13:00の回、15:00の回の3回実施した。多目的ホールを全面貸し切りに行行った。

委員：1回の参加者を50人集めるという目標にされていると思うので、違う日に実施する、施設を分ける等は考えなかったのか。

団体：イベントは講師の方の予定に合わせて実施した。毎年8月に機械週間というものがあり、この時期に工作のイベントをするということで、やらせていただいた。日にちを分けてやるのも周知の部分も含めて良いと思う。

委員：50人集まると、講師の方に声を掛けていただける回数が減ってしまうので、少ない参加者で満足された方が多いのかと思った。バランスが難しいと思う。もし今後やられるのであれば、お考えいただければと思う。

委員：リピーターの方が多いとあり、楽しみにしているのだと思うが、最終的には障がい者の方も健常者の方も一緒にやれるというところ、障がい者の理解を深めるというところが目標だと思う。障がいのある方やサポーターの方も含めて、周知方法を今後どのように考えているか。

団体：今回初めて養護学校や作業所の方にもイベントの案内をしたが、今回、集客が思ったより少なかった。今後、いろんなアピールをしていきたいと思う。障がいがあってもなくても、皆やることは一緒なので、気がついたらこの方が車椅子に乗っていたと後で気が付くというような感じでやってもらえたら良いと思い活動している。これからも頑張っていきたい。

委員：市からの後援があっても良いと思った。相談しても良いのではないかな。趣旨は素晴らしいので頑張ってもらいたい。

委員：目的は非常に良い。ただ、目的を達成していくための手法がまだ追いついていないというところがある。工作はいいが、そもそも目的に適っているかどうかというところを少し冷静に見ながら検討していただいた方が良い。

(9)

事業名：社会起業家・副業家としての創業機運醸成事業（スタート助成）

団体名：サステイナブルな市民活動研究所

委員：団体の存在意義、足場を組み替えていくというところに至った主たる原因はどこにあったのか。

団体：団体はどこも同じような課題を持っていると思う。特に持続可能な運営をしていくとなると、経営資源が必要であり、当時、その課題はお金だった。同じような課題を持つ人たちと集まり議論しながら解決の糸口を見つけるために、この団体を作り、活動してきた。今回、ミドル世代にメッセージを作って届けていこうとする中で、やはり、ミドル世代は救われない。「ミドル世代はまだ、現役だから自分たちで頑張っていきなさい」と、なかなか支援が届かない。今から新しいアクションを起こしていくことが自分自身の幸せを作っていけるのだと届けたいという気持ちに変わりシフトしたという次第である。

委員：社会副業家セミナーは実際どうだったか。それを聞いた方で活動に参加しようとした方、活動を始めた方がいるのか。実際、参加者の目標が60名のところ26名だったが、それでも十分だったのか。

団体：キャリアコンサルタントのようなことをされている方に、社会人に対しての新しい働き方、生き方の提案をしたいと話をしたところ「社会副業家」という言葉に共感していただき、キャリアの築き方の話をしていただいた。話を聞き、我々運営メンバーの中にも会社員をしながら、市民活動を始めた方がいる。その方のリアルな意見を聞きながら、一歩踏み出せていない会社員の人たちが刺激を受けて、自分にもできるかもしれないという背中への押し方をしたいと思った。前半は良かったが、後半になると参加人数が少なくなった。現役の人たちにイベント情報を届けたいと思い、公共施設や広報まつどを使わせて頂いたが、なかなか見る機会が少ないというところが実感で、どうやったら情報を届けられるのか、難儀した。最終的には濃いメンバーが残ってくれて新しい活動の運営の方にも関わってくれたことを考えると、数ではなく質だと感じる。

委員：活動資金確保、後継者不足といった問題は、町会自治会等にも当てはまると思う。活動の中で、後継者育成や発掘、あるいは人と人、団体と団体のマッチングなどをされてきたのか教えて欲しい。こちらの団体のサステナビリティというものをどのように今後考えているか。

団体：今回は1年間の活動ということで、現役世代の方たちにアプローチするのに留まった。実際は団体側に接続することで後継者不足を担えるような連携の仕方をしたいと考えていたが、そこまで及ばなかった。この団体は、団体の継続性を考えている団体として活動を続ける。また別の団体を立ち上げるが、そちらは会社員を発掘しサステイナブルな市民活動研究所に繋ぐことで団体連携していけるのではないかと考えている。参加してくれる人たちにどうアプローチしていくかというところは、課題はある。しかし、現役世代の人たちにアプローチしていくというときには、もうちょっと緩

いところから始めて行っても良いのではないかな。まずは、交流会のようなものから作り、我々の運営サイドのメンバーを育てていきたい。

(10)

事業名：日本語を母国語としない子どものための学習支援事業（協働事業）

団体名：認定NPO法人外国人の子どものための勉強会

担当課：国際推進課

委員：地元の大学との協働連携が良い成果に繋がったと思う。今後、市内でもっと教室を増やしていくとか、どのような展開を考えているのか。1つの団体で市の全体を担うというのは難しいと思うが、どのように思っているか。

団体：教室に入りたいという方が大変増えている。今回のように負担金をいただいた場合はまだしも、会計そのものが、生徒の参加費と会員と寄附金に頼っている事業なのでどこまでも大きくすることはできない。すでに3か所で6つの教室を開催している。その内、1つは民間の方が貸してくれている場所。もう1つは文化ホール、あと1つ新松戸市民活動支援コーナーは、協働事業の間は優先的に使用できたが、次からは普通に抽選でという不安定な状況である。教室を増やすというよりは生徒たちにより良い教育をして充実させていくという方向である。

委員：また市と一緒に協議検討して進めていただければと思う。

団体：協働事業の前に助成事業をやらせていただき、その時新松戸教室を新たに作るのが課題だった。コロナが明けてこの3教室に定着したというのが生徒もスタッフも増加した状況だと認識している。財政的に主に寄附で成り立っているが、節約をしたり経費を見直したりして、今後、3教室あれば市内全域をカバーできると思うし、今の70名のスタッフの体制で一応の要望には応えられている。受験教室もやっているが、市内からだけではなく、近隣からも参加させて欲しいという声もあり、こちらも受け入れている。中学校を卒業したがまだ高校に入れていない外国から来た方も受験教室には受け入れている。協働事業でスタートしたこの3教室を安定的にやっていく。今の体制を維持していくことがまず課題だと思っている。

委員：今後、連携というのが非常に重要ではないか。これだけ拡大したものをどう維持していくかというのが重要で、1つの課題だと思う。人材をどの様に集めていくかというところが非常に難しいのではないかな。他市では行政というよりは国際交流協会等が中心となりいろんなところと連携するということが行われている。担当課は1つの取り組みとしてどこまでできるのか、あり方を問われるだろうし、おそらく他の課とも関わりのあることだと思う。団体がどのように資金を集めていくかということも非常に重要である。ここまで大きな事業となったので、これからの継続のためにも、関係者、関係団体と一緒に再検討する局面に来たという気がする。団体の中でいかにいい知恵を使っていい人材の活用ということを考えていかなければならない。深刻な問題だが、この活動はそれだけ意義のある素晴らしい活動だと考えている。

会 長：総評

5 閉会
(事務連絡)